児童期の心身発達に関する体育心理学的研究

～四半世紀に及ぶ精神作業検査結果を中心に～

Ⅰ　はじめに

第2次世界大戦終了後の窮乏時代、北国の身体検査風景はノミ・シラミに喰われたガンベだらけ、栄養失調の骨皮筋衛門たちが震える品評会に等しかった。DDT散布の日を身体検査日に重ねないと出席率が上がらない。今では考えられないことだが、頭から真っ白なDDTの粉末をかけられ、粉の白さが残っている1週間は風呂にも入らない。餓えと痒みの記憶がこびりついた小学校時代の発達記録がこうやって残された。

明治30年（1897）「学生・生徒身体検査規程」（官報，1897）が定められるに先立って、現長野市立城山小学校では、身長・体重・胸囲・座高の身体指標が計測されていた。その記録を遡れば、日本民族の一世紀を越す身体発達の経過が一目瞭然である。近代国家の仲間入りとともに「男5尺のからだ」が大型化していく中で、戦争末期から終戦直後の数値は、体重の激減ばかりか環境の影響を比較的受けにくい長軸の発達まで、痛烈な退行を余儀なくされた。平和を希求するならば、戦争加担と平行して児童が示す身体指標値の低下現象は、体育学の立場から反戦を主張する実証例となるであろう。

内田・クレペリン精神検査（UK）法の教育利用（小林，1954）は長野教育界の支持を得て始まった。1950年代頭初から長野県下全98高等学校と中学校のほぼ半数にUK検査を実施、現在の判定法の基準となる「人柄類型不変・精神健康度可変」仮説を検証しながら、児童・生徒の個性理解（小林，1970）とクラス指導に取り組んだ。城山小学校が「個性・能力開発教育」（村田，1971）の成果を世に問うたのは昭和46年、日本で最初に身体計測を始めた教育への情熱が、時代を越えて受け継がれ、精神的側面から児童理解を進める先駆的試みに結びついた。しかし、身体指標の計測と異なり、UK法の判定には熟練が要求される。心理テスト批判やプライバシーの保護が尊重される時流と相まって、法的根拠をもたない精神発達データの蓄積は断片的にならざるを得なかった。

大阪における本研究の始まりは昭和48年（1973）、必ずしもこれほど長期に亙るとは考えていなかった。前年に「児童期における持久走トレーニングの是非」に関する諮問（辻野，1974）を受けて、精神的効果の特定を行った。3ヶ月の実験期間に協力校の先生方の関心が高まり、大阪教育大学附属小学校の一つが生徒指導の一環として、試験的にUK法を採用する運びとなった。全校児童の人柄類型と精神健康度の判定、クラス別傾向分析と指導指針を書き添えた後、全担任と3日間をかけて面談を行う。この席で指導が困難な児童の理解と対応やクラス指導について相談にのりながら、先生方の児童観とUK法判定基準の整合性を検証する機会が得られた。6年を経たとき、巧まずして「児童期の精神発達に関する縦断的研究」（船越，1984，1985）（藤田，1997）が成立していた。

毎年1回、6年間の心理データを残した卒業学年が25期分、30年間が経過した。この間の卒業生総数2829名、UK関連分析可能児童数2773名（98%）、平均曲線化可能データ2196人×6回=13176枚は、児童期の精神発達を検討するには得がたい資料である。学年別心的機能の発達特徴を性・個性・精神健康度別に究明するばかりでなく、体育・学業・生活行動関連項目毎に検討を加える。データが膨大なため今回は基礎分析の範囲を出ないが、児童期の心身発達に関する法則性について、体育心理学研究の視点から明らかにしたい。結果が教育利用に資することを期待しつつ‥‥。

Ⅱ　研究方法

1　使用UK検査用紙

本研究に用いられたUK検査結果は当初、UK法による児童理解とクラス指導上の指針を得るために実施されたので、児童用検査用紙を用いたが、1年生については加算作業が重荷のため⊗法による幼児用検査用紙を使用した。

2　検査の実施と整理

全児童にUK検査を実施するにあたり、初年度（昭和48年）に全教職員に対する説明会を開い

た後、行事が少なく学校生活に落ち着きのある1学期後半の6月下旬〜7月上旬に実施した。検査者はクラス担任が担当し、全クラスの検査終了後、大学宛に郵送。夏休み中に体育心理学実習の一環として、①整理作業（曲線引き、誤答調べ、作業量段階区分）と、②判定作業（人柄10類型と精神健康度5分類）、③集計作業（クラス別・性別・個人別人柄類型×精神健康度判定表、性別・人柄類型別および類似人柄群別・精神健康度別クラス集計表、学年別・クラス別人柄類型・類似人柄群別および精神健康度別全学年集計表の作成を行った。

3　報告と面談

B5版大クラス別集計表に人柄型×精神健康度分布からみたクラスの傾向分析と指導指針を書き添えた後、全学集計表とともに報告書を送付。8月下旬〜9月中に1クラス25分〜60分、通算2〜3日間の面談を行い、クラス担任の児童理解とクラス指導に対する助言および行動実態の確認を行った。

4　個人別発達特徴の確認とデータの保管

6年次終了時、クラス担任宛に行動記録票を送付。在学中の顕著な個人別発達特徴の確認を求めた。各年次に実施した検査結果とともに、30年間25期分の行動記録票を大学にて保管した。

5　項目分析

検査を始めて6年目、昭和53年当時の担任との面談を通じて、指導上、手のかかる問題行動が浮かび上がってきた。回答を憚る問題は除外し、体育・学業・生活行動に関する計19項目を設定した。UK関連項目とともに高評価項目をも加えた分析視点の分類は次の通りである。

1）全児童を対象とする学年別心的機能の発達特徴

i　性別2分類と全体傾向
ii　個性（人柄型）別13分類
iii　類似個性（人柄群）別5分類
iv　精神健康度別6分類

2）検討項目該当児童の学年別心的機能の発達特徴

i　体育関係6項目
　i）運動優秀児　ii）運動遅滞児
　iii）身体の大きい子　iv）身体の小さい子
　v）肥満児　vi）病虚弱児
ii　学業関係4項目
　i）学業優秀児　ii）芸術志向児
　iii）附属中学校進学児　iv）附属中学校外進学児
iii　生活行動9項目
　i）よく発言する子
　ii）ほとんど発言しない子
　iii）アイデアの豊かな子
　iv）行動の遅い子
　v）整理整頓のできない子
　vi）友達の多い子
　vii）友達のできない子
　viii）いじめっ子
　ix）いじめられっ子

3）発達特徴の年次推移

i　25期別・学年別心的機能の発達特徴
ii　5年単位別・学年別発達特徴

6　分析方法

1）年次別平均曲線

1年次から6年次までの発達経過を見るために6学年別平均曲線を一図に並記した。縦軸にUK作業量、横軸に前後期作業別計30分の単位時間と学年を配して、左上欄に分類別線分と該当人数を示し、下欄に後期増加率（休憩効果＝休効）と標準偏差を括弧内に記した。曲線経過、作業量水準、休効の増減を基に、該当項目および比較群間の発達特徴を曲線理論によって解釈する。6回の検査結果を残したもののみを考察対象とし、欠測値および平均曲線化不能の異常曲線は除外した。したがって表示人数よりも作図に用いた総人数は少ない。

2）人柄類型×精神健康度分布表

最終6年次に確定した第一判定人柄型と、精神健康判定に基づいて男女別と合計の3分類毎の出現数を各型の上欄に、その百分率を下欄に小文字で記した。特定人柄型の多少および健康度分布が、該当項目や比較群間の特徴を弁別する役割を果たす。同時に性別出現率の差が意味をもつ場合があ

る。6回の検査を終了した者全てを集計した。

3）類似人柄群×精神健康度分布表

UK判定を介さずに行動観察に基づいて個性を弁別すると、Ⅰすなおな子：適応がよく教師にとって手がかからない、Ⅱまじめな子：柔軟性は不足するが得心すればやり通す、Ⅲげんきな子：エネルギッシュで行動的、Ⅳとっぴな子：教師の指導は入りにくいが独創性がある、の4分類に収斂する。集団指導では各群の出現率と健康度分布によって現状把握が可能であり、そこから指導指針を示すことができる。本表は、Ⅰ群4類型（1、2、3-2、7型）、Ⅱ群3類型（3-1d、5、10型）、Ⅲ群3類型（3-1、4、6型）、Ⅳ群2類型（8、9型）を分析対象群とし、Ⅴ群（3-4循環型）は群間比較から除外した。

7　統計処理

考察の対象となる出現比率の差の検定には、χ^2-値と臨界比（CR）を求め、平均差の検定には分散分析とt-値を活用した。いずれの場合にも2要因から1要因を経て細部検定を施し、有意水準5%以下をもって差を確定した。

8　分析対象

大阪教育大学附属H小学校卒業者25期生分

男児1421名　　女児1408名　　計2829名

9　検査実施と分析対象児在籍期間

昭和48年4月(1973)～平成15年3月(2003)

Ⅲ　結果と考察

1　考察対象区分

全在学児童2829名の中から、分析項目によっては次に示す対象を外して考察した。

1）6年間6回のデータが揃わなかった児童

2）判定不能曲線を示す児童

3）平均曲線化不能曲線を示す児童

さらに30年間で延540クラスが活動したが、そのうち行動記録表未収納1クラスが確認されたため、母数2829名に対して考察対象数が減少した。使われた考察対象数は次の通りである。

ⅰ　2773名：UK検査6回完了者

ⅱ　2735名：行動記録収納者

ⅲ　2676名：人柄群関係の考察では、3-4循環型を除いて出現率を求めた。

ⅳ　2196名：誤答多発、検査時間無視などの平均曲線化不能曲線を除いた。

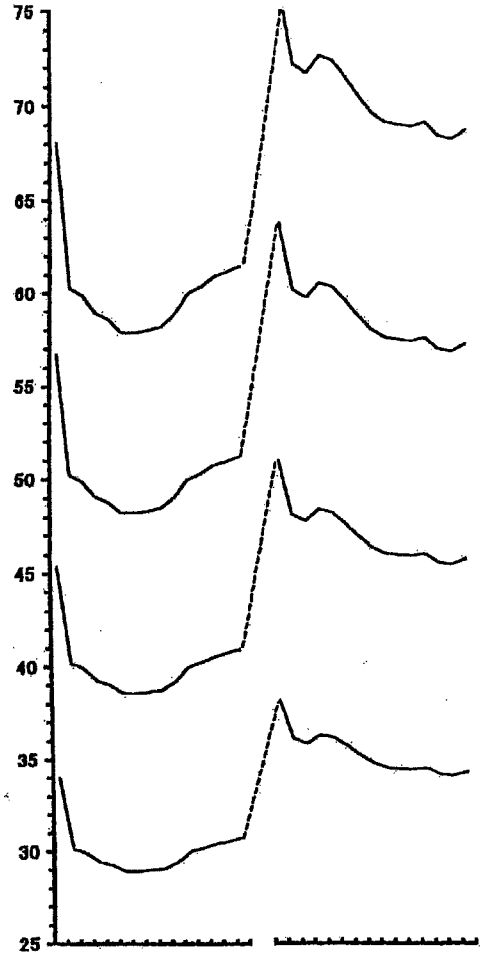


図1　作業量段階別平均曲線（内田，1957.7）

2　UK曲線解釈上の留意点

連続加算法は、初期の精神病理学研究における臨床事例（Kraepelin, 1896）への試行に始まり、症例解釈の客観化を求めて考案された。精神作業検査法（内田、1957.8）として成人の集団検査が可能となった原点は、健常者常態平均曲線（内田、1957.7）の確認と作業5因子説の検証にあった。加算の答えの多くが2桁となる成人用検査用紙を用いた作業量段階別平均曲線は、図1の通り、前期V字ー後期W字型を右下がりにした経過を辿る。この常態曲線は、①意志緊張：第1行目の突出、②慣熟：前期中半からの作業量増加、③興奮：慣熟時の曲線動揺幅拡大、④休憩効果：後期増加率＝前期作業量に対する後期作業量増加、⑤疲

労：後期前半部からの作業量低減の５因子によって説明された。現在の多変量解析では②と③を１因子（興奮）と見なす４因子説が有力であり、以下の図例解釈は、４因子の変動を基盤にして行う。

次いで、人柄類型については、表１に見る通り、成人用基準として一般化した名称に、整合性を欠く不適切なものが含まれているので、児童理解を前提とした平仮名表記に改めた名称を用いることとした。表１に対応する人柄類型別個人別曲線の構成は図２に示すとおりである。人柄類型不変－精神健康度可変仮説は、UK 法研究者の間では定説である。しかし、児童用の曲線判定は、低学年では作業量水準が低いこと、不調時の曲線変動が拡大しやすいことがあって難しい面がある。さらに、幼児用の判定は意志緊張の表れが少なく、平均曲線が上昇傾向をとるため、成人用や児童用とは異なる基準を設定する必要があった。これらの点を解決するために、本研究の集計時には、１人６枚の曲線を俯瞰して最終判定を下した。すなわち、成人用判定基準に加えて児童用と幼児用の判定視点を確認した上で、各年次の判定のみではなく、６年間６枚の曲線変動の法則性をも加味したので、判定精度は成人用と同等以上の水準を保っている。

精神健康度は、学年別平均作業量段階と平均後期増加率を基準として、５段階区分を採用した以外は、成人用の判定法を採用した。

３　全児童を分析対象とする学年別心的機能の発達特徴

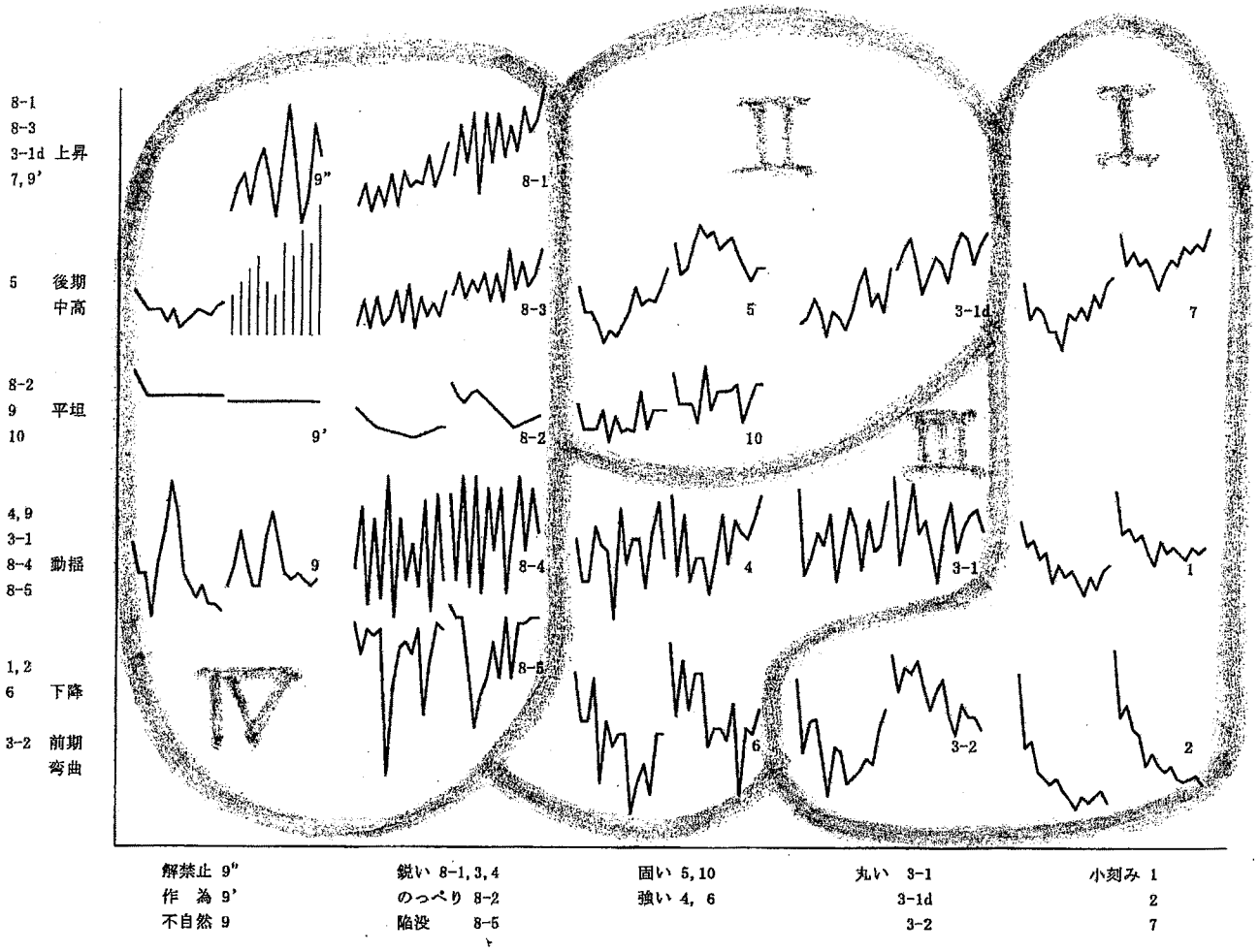
１）全児童および性別発達特徴

ｉ　平均曲線

個々の人柄類型別精神健康度に関する細部分析に入る前に、全対象の性別発達特徴を捉えると次の通りである。人柄×健康度情報を必要とする場合は次節以下を先に参照されたい。図３より破線で示される全体平均曲線の上段に太線の女子、下線に細線の男子が一貫して位置づけられ、児童期の精神発達は女児優位の現象が確認された。１年次は⊗法のために負荷が軽く、２年次よりも作業量が多い。しかし、２年次からの加算作業では心

表1　人柄類型・名称・番号新旧対応表

＜旧　名称＞	＜新　名称＞	（案1）	類似人柄群
1　おだやか型	1　穏健	おだやか型	Ⅰ群　すなおな子
2　神経質型	2　細心	こまやか型	1　穏健　おだやか型
3　躁うつ型	3　躁鬱		2　細心　こまやか型
3-1　朗らか型	3-1　明朗	ほがらか型	3-2　温和　なでやか型
3-1d　じっくり型	3-1d　重厚	じっくり型	7　安定　しなやか型
3-2　温和型	3-2　温和	なごやか型	
3-3　抑うつ型			Ⅱ群　まじめな子
3-4　循環型			3-1d　重厚　じっくり型
4　強気敢行型	4　剛毅	したたか型	5　実直　しっかり型
5　地道粘り型	5　実直	しっかり型	10　堅固　きっちり型
6　あっさり実行型	6　軽快	さわやか型	
7　内的安定型	7　安定	しなやか型	Ⅲ群　げんきな子
8　分裂型	8　孤高	ぽっつり型	3-1　明朗　ほがらか型
8-1　むき熱中型	8-1　昂然	きっぱり型	4　剛毅　したたか型
8-2　鈍麻型	8-2　悠然	ゆったり型	6　軽快　さわやか型
8-3　自閉型	8-3　端然	ひっそり型	
8-4　敏感型	8-4　超然	ほんのり型	Ⅳ群　とっぴな子
8-5　停電型	8-5　飄然	ふんわり型	8　孤高　ぽっつり型
9　自己顕示型	9　怜悧	はでやか型	9　怜悧　はでやか型
10　粘着型	10　堅固	きっちり型	Ⅴ群
			3-4　循環型



Ⅰ群：すなおな子　Ⅱ群：まじめな子　Ⅲ群：げんきな子　Ⅳ群：とっぴな子

図２ 曲線形状別人柄類型別曲線範例と類似人柄群４分類一覧

的エネルギー水準と目される作業量と精神的健康水準の第一指標である後期増加率(休憩効果)は、ともに学年進行と並行して順増し、健康な発達過程を見てとることができる。図４の健康度分布において確認される通り、女子が男子よりも健康度が高く、作業量と休憩効果とを合わせて男子よりも発達が早く順調と考えてよい。

ii　精神健康度分布

平均曲線で示された健康な発達特徴は、卒業学年の健康度分布にも反映されていた。楽しく伸び伸びと活動する高度＋中上度群が 42%の高率を示す一方、非社会的あるいは反社会的不適応を起こしやすい低度＋中下度群は 24.4%。後述する進学プレッシャーを受けながらの比率としては、よく持ちこたえているといえよう。とくに女子は男子と比べて好調であり、健康度の高あるいは中上度が多く、中下あるいは低度群の少ない結果が示された。

iii　人柄型・群別分布

卒業在籍数 2829 名に対して、人柄型判定可能者 2676 名（94.6%）の人柄４群別該当数率を見ると、図５の通り、常識的であるよりも独創的な突飛な子の評価を受けるⅣ群が最も多く、真面目な努力家Ⅱ群が続いて共に３割強を占める。適応のよい素直なⅠ群と合わせて９割を越し、威勢のよい元気なⅢ群は少数派である。性差を見ると、男子は突飛な子と元気な子が、女子は真面目な子が多いのも本集団の特徴を示す。図６より単一類型では孤高を持する８ぽっつり型 23.1%、重厚・篤実に通ずる 3-1d じっくり型 21.8%、温厚・協調的な 3-2 なごやか型 17.0%、自尊心が強く勝ち気な９はでやか型 11.7%が上位を占め、これら４類型で７割を越す。

人柄不変仮説から敷衍すると、子は両親からの

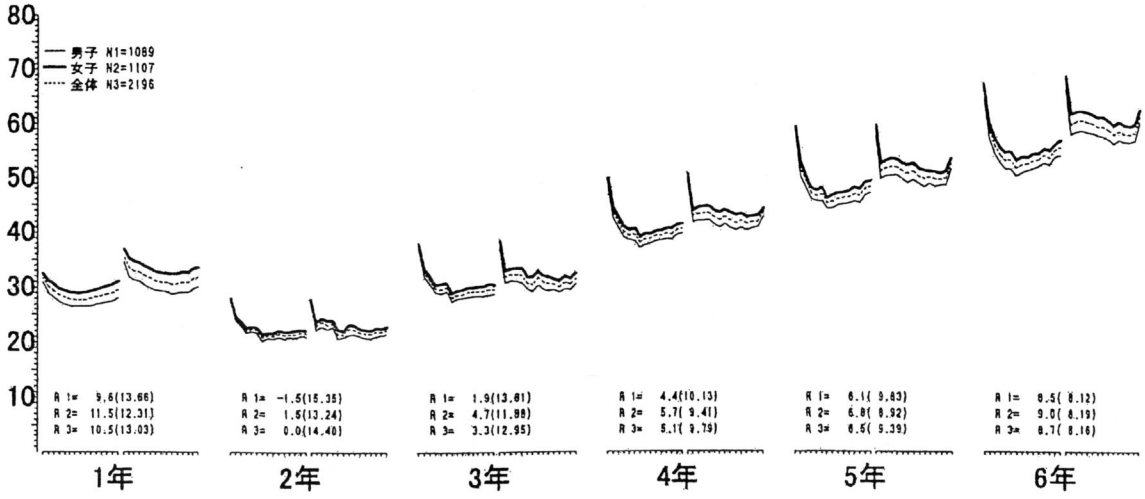


図3 全児童における性別平均曲線

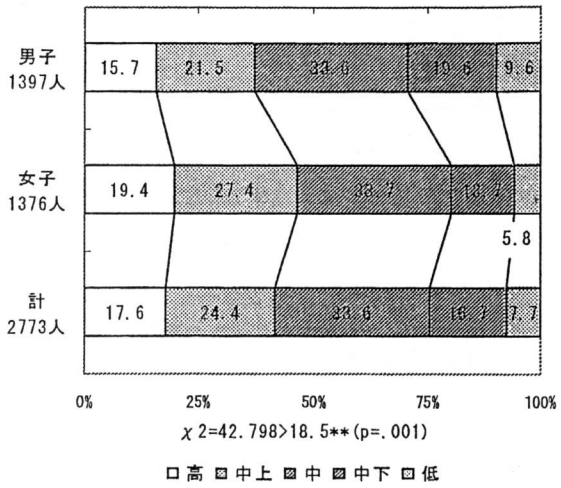


図4 性別精神健康度出現率：%

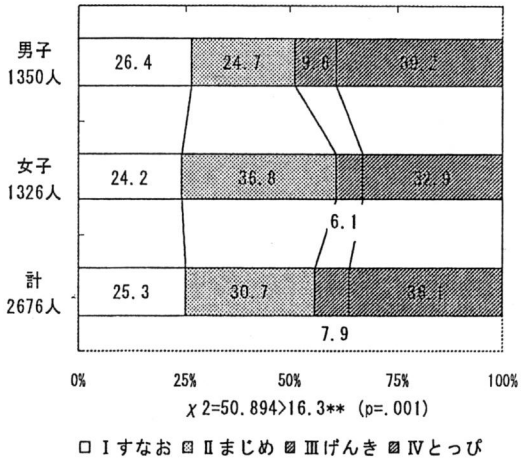


図5 性別類似人柄群別分布：%

個性を受けついでいる。教育志向の強い家庭からきた子たちといっても、人柄類型別出現率から見て附属志願の理由は多様であり、少なくとも現実的実際的な行動派は少数派にすぎなかった。

以上の通り、男子は個性的な突飛な子、女子は真面目な努力家が多い集団にあって、30年間にわたる全在籍児童の平均的発達特徴は、入学時から卒業学年まで一貫して女子の優位性が認められ、心的エネルギー水準と精神健康度の高さにおいて明らかに男子を凌いでいた。

2）個性（人柄型）別発達特徴

UK 法による人間理解の基礎に曲線論と人柄論がある。「曲線の種類だけ人間の種類がある」とい

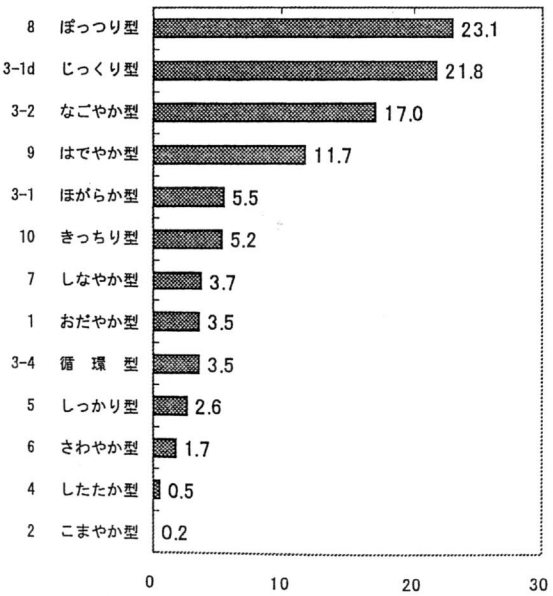


図6 人柄類型別出現分布:%

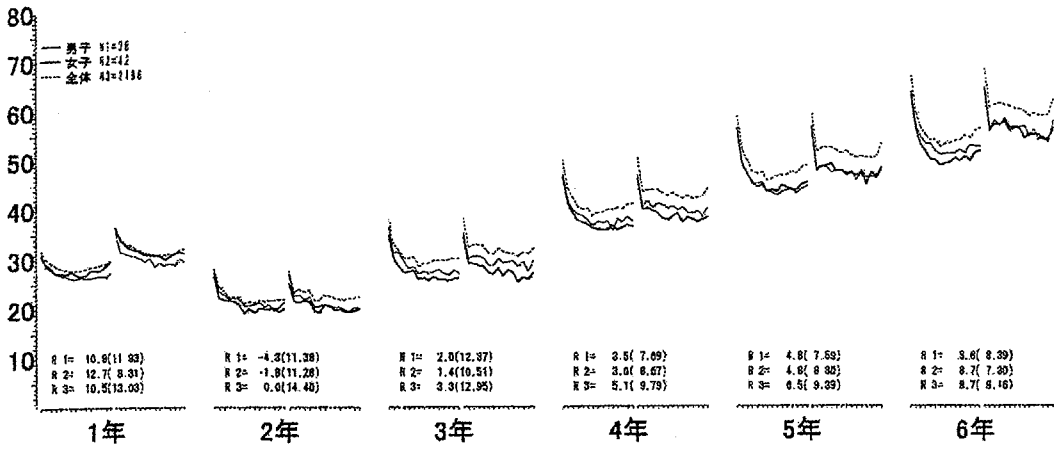


図7-1 人柄類型13分類　1おだやか型

う類型説の立場に立って、類似人柄群の判定と日常生活における行動特徴との対応確認に腐心した。曲線は健常者常態平均曲線からの逸脱を個性と捉え、曲線の基本傾向 5 分類（上昇、平坦、下降、弯曲、中高）、曲線の動揺幅 2 分類（大、小）、曲線の出入りの形状 9 分類（小刻み、凸凹丸い、固い、鋭い、角ばる、のっぺり、陥没、飛び上がる、不自然）の下で、16 種類の曲線と 10～17 人柄類型を確認した。人柄類型の記述特徴は、①ものの考え方、②情意の状態、③仕事ぶり、④社会性の観察視点から事例ごとに曲線との対応を試みたものである。現代心理学では①思考、②意志と情動、③学習、④対人関係の各論が追求するテーマを包括的に捉え、一個人が示す作業曲線に投影して個性を捉える道を進んできた。

図 2 に示した人柄類型の典型的曲線例は計 18 種類ある。9 はでやか型は、よく見られる不健康時の例を揚げたが、他は大旨健康時の曲線である。縦軸に曲線の基本傾向 5 種類と横軸に曲線形状 5 種類を配し、該当人柄名を添えて示した。現在まで使用されてきた人柄番号と名称は、人柄型と行動特徴の対応が確認された時点で随時追加されたため、番号も名称も整合性を欠く。その点、UK 研究者以外から折につけて指摘されるが、50 年を超えて慣れ親しんだ経緯があって、変更の断が下せない。

今回は児童用での検証なので、親しみやすさを前提に平仮名の名称を工夫した。しかし、一気に番号まで変えることは混乱を招くので、現状の名称と新名称に平仮名の名称を並記して考察を進めることとした。

UK 法は曲線論と人柄論の両面から進められてきた。曲線論は 1 枚の曲線解釈から人間理解を進める方向をとるのに対して、人柄論は行動観察の中に UK 法的人間理解を取り入れる。両論が相俟って人間理解を深めてきたともいえる。その中から、個性理解に基づく指導法や適性予測、事故防止などの発展があった。因みに本研究対象校の面談から帰納された、類似人柄群 4 分類の範疇を図中に黒墨で示したが、集団の実態把握＋指導指針を得る際に大きな成果を上げつつある。

本節では類型別一般的特徴を紹介した上で、各類型の平均曲線を中心に発達特徴を把握する。

1　おだやか型：図 7-1

無理なく適応し、素直でおだやか、おとなしい印象を与える。教師にとって指導しやすく、手のかからない子たち。しかし、不健康になると、引込思案、無気力、小心などが表れる。曲線は、作業量と後期増加率が順増するものの、男女ともに全平均を表す破線の下方に位置し、緩やかな下降傾向を示す。女子は全平均よりも上方に位置するのが一般的であるから、相対的に低迷振りが目立

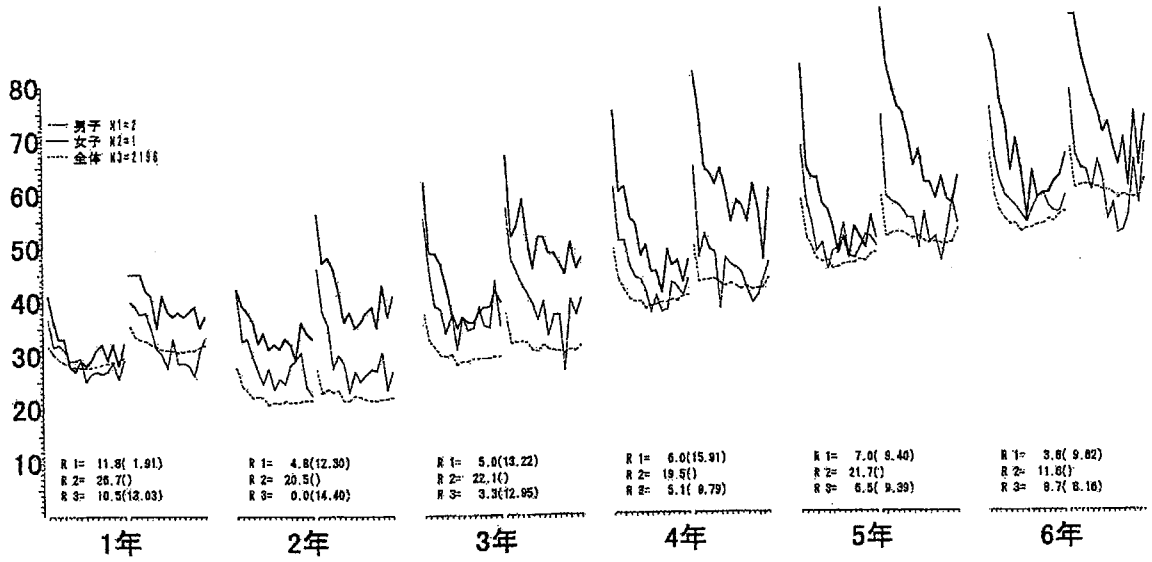


図7-2 人柄類型13分類 2こまやか型

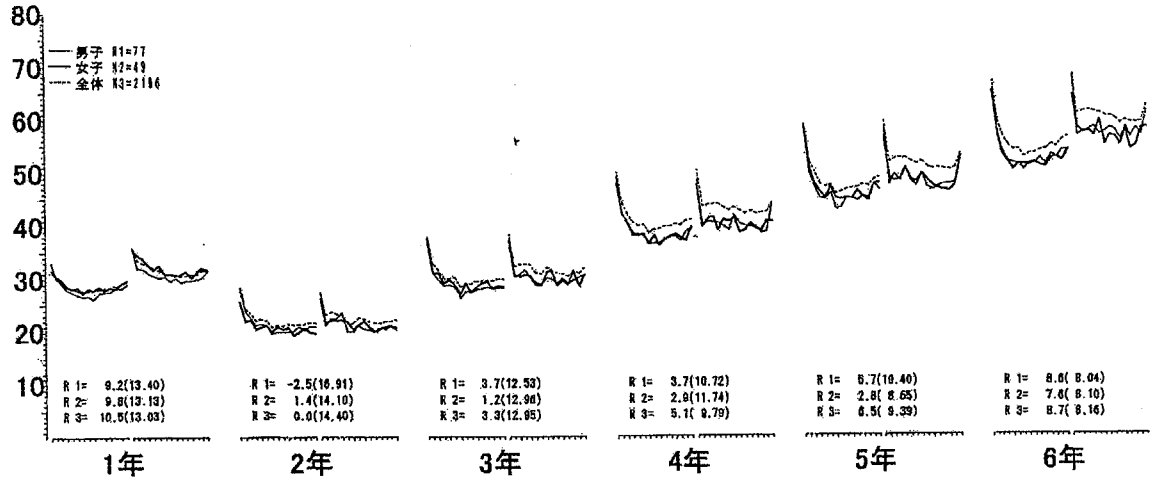


図7-3 人柄類型13分類 3-1ほがらか型

つ。とくに、3・4年次の太線は下降が著しい。おだやか型がもつ「気力不足になりやすい」人柄上の難点が発達過程にも影響をおよぼしていると見てよいであろう。図6に示した通り該当数は計98人・3.5%、13類型中8番目。出現率に男女差なく、47：51人であった。

2　こまやか型：図7-2

細心、慎重、几帳面で細やかな感受性の持主。気づかいが昂じると無気力、心配症、自信喪失へと進みやすい。30年間に確認された人数は僅かに5名、出現率は0.2%で最下位であった。太細の個人曲線のように大きな下降を示し、5年次の細かな出入りが典型例である。小さな刺激に素早く反応するが、強い刺激に弱く疲れやすい特徴が作業経過に表れている。全平均よりも高い作業量水準を維持しているが、それがなければ厳しい環境への適応は難しいのか、地域性の影響か、本例数では何ともいえない。しかし、作業量の順増と女子優位の一般法則は少数例の中にも生きている。

3-1　ほがらか型：図7-3

明るく元気。よく笑い、よく喋る。こだわりなく誰とでも親しむ。現実的・実際的な活動家。し

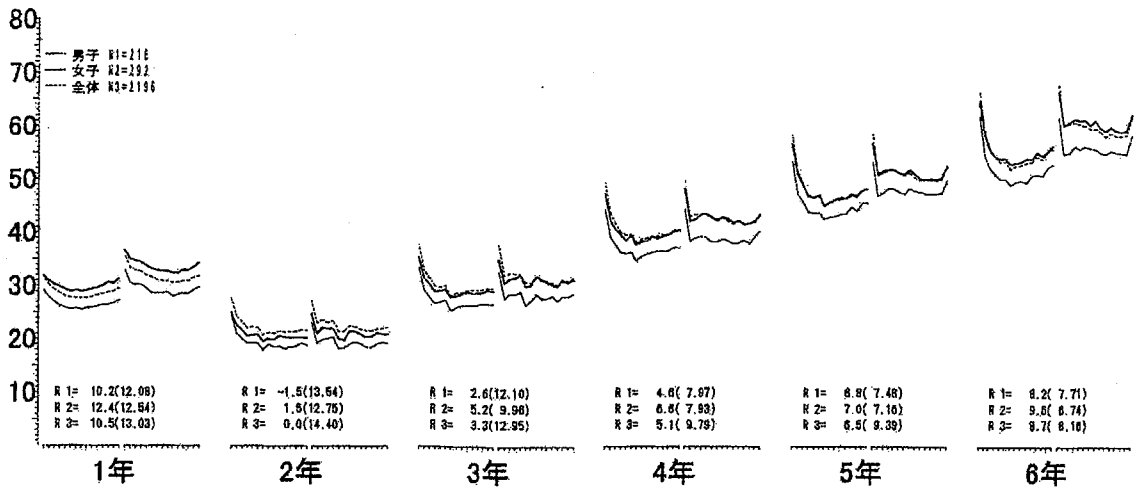


図7-4 人柄類型13分類 3-1dじっくり型

かし、意志不定になると、注意散漫、調子もの、出まかせ、暴力などに発展しやすい。類型説における躁鬱型の躁状態が定着したものである。個人曲線は出入り幅が大きく、緩みがないか上昇傾向を保つ。その中で 3〜5 分単位の丸味のある動きと飛び上がりを示す。平均曲線は学年進行につれて全平均との差が大きくなるが、男女差なく、ほぼ同一の経過をたどっている。出現率順位は 5 番目、152 人・5.5%。男子が 90 人・59.2%と多かった。健康度判定 3 分類の出現率比較では性差なく、入学直後の 1 年次は低度群が少ないが、2、3、6 年次は 3 分類が同比率、4、5 年次に低度群が多かった。外向的、活動的な他の 2 人柄型（4 したたか型、6 さわやか型）とともに、作業量水準が全平均よりも低い点および躁鬱型の他の 2 型（3-1d じっくり型、3-2 なごやか型）と比べて出現率の低い点は、知的・静的活動への適応を考える視点を提供しているのではなかろうか。

3-1d　じっくり型：図 7-4

大人なら温厚、篤実、重厚な印象を与える。御輿を上げるのに時間がかかるが、やり始めるとじっくりと仕上げる。ぬくもりあり、なれた環境でははしゃぎもする。鬱が深まるとはきはきせず、ぐず、憂鬱、意固地な面が出てくる。曲線は緩まず、上昇気味。児童用検査用紙では 1 行目が突出しやすいが、全児童が下降傾向を示す 2 年次と 3 年次男子を除いて緩みがない。1 年次を除いて女子は全平均とほぼ同一の作業量水準と作業経過を示すのに対して、男子は明らかに作業量水準が低く、下降傾向が尾を引く。健康度判定では、進学プレッシャーの強まる 4・5 年次に性差が消えるが、他学年は女子の高度群が明らかに多かった。出現率は全人柄類型中第 2 位、605 人・21.8%を占め、女子が多かった（男：女＝43.8：56.2%）。

3-2　なごやか型：図 7-5

適応よく、温和、協調的で着実さもあるが、とことんまで粘る強さは不足する。気分の明暗によって積極性が異なり、行動しながらあれこれ気にするところがある。積極的気分が欠けると、消極、悲観、苦労性が表立つ。

曲線は、1 おだやか型と類似するが、作業量増に伴って前期が下降から弯曲に転じる。男子の曲線が全平均と同傾向・同作業量水準を示すのに対して、女子は明らかに作業量が多く、弯曲が低学年次から認められる。適応のよい健康な発達過程が作業量と休憩効果の漸増、前期弯曲によって示され、成人の曲線型への近接が明らかである。該当率は 472 名・17.0%、出現順位は 3-1d に続いて 3 番目、大阪地方は躁鬱性格（3-1、3-1d、3-2）地帯（宮城,1969）とよばれる通りに多かった。しかし、出現率に性差は認められなかった（257：215 人）。

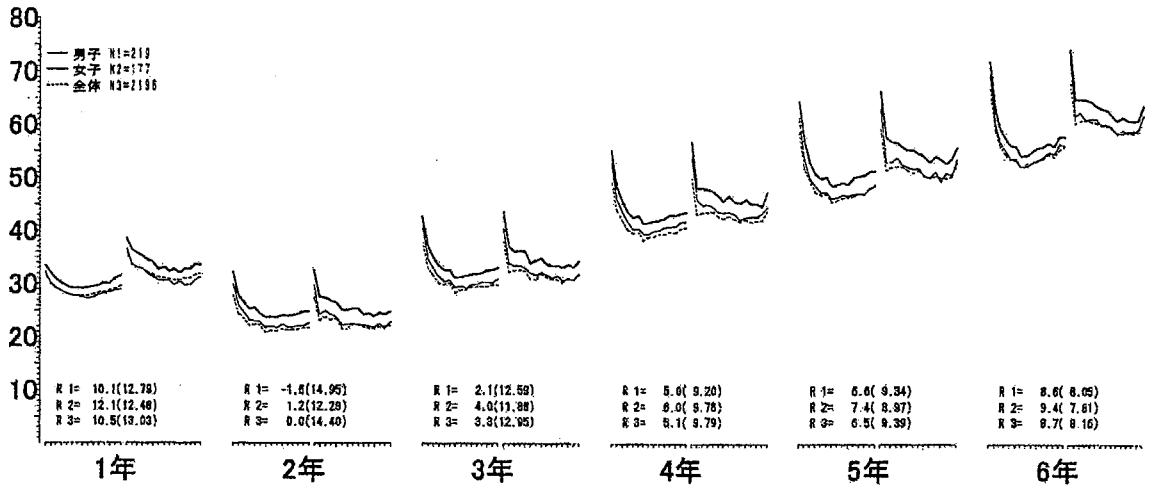


図7-5 人柄類型13分類 3-2なごやか型

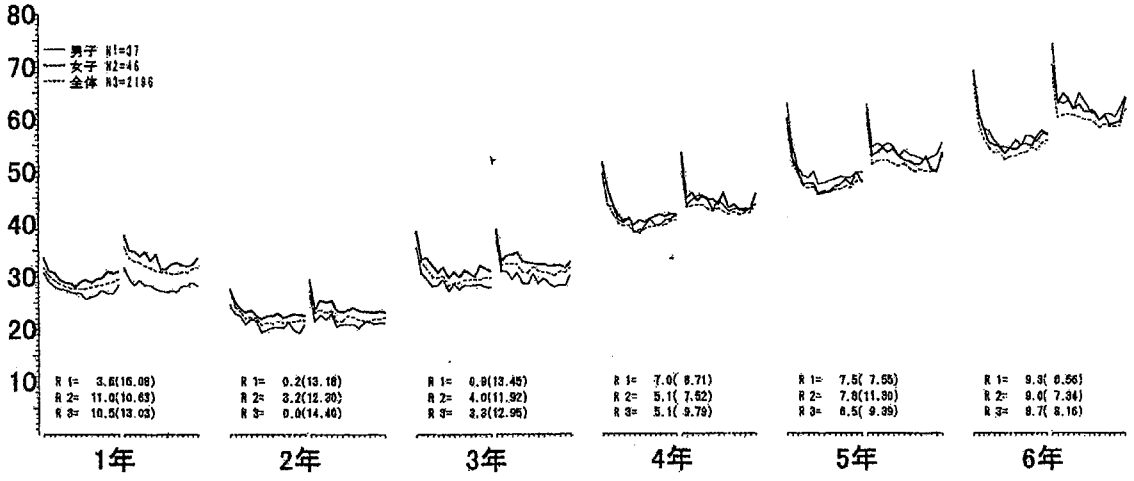


図7-6 人柄類型13分類 3-4循環型

3-4 循環型：図 7-6

この型は、大なり小なり躁状態と鬱状態が同一人の中で繰り返される現象を前提に、躁鬱性格に限定して命名された経緯があるため、3-1 軽躁、3-2 温和、3-3 抑鬱の 3 分類に加えて、とくに回帰性周期の確認されたものを 3-4 循環型と命名した歴史がある。現在では、3-1 と 3-1d が曲線上で近接し、3-3 は 3-2 に吸収され、3-3=3-2d の考え方の下で分類名から消えてしまった。一方、曲線研究の進行過程で周期的に曲線変化の法則性を認める類型は、躁鬱型以外にも該当例が出てきたので、これらも加えて 3-4 循環型とするようになった。周期は多様のため循環型のパターンを平均曲線から読むことはできない。ここでは、他類型と同様に学年進行と並行して、心的エネルギー水準が上がり（作業量の順増）、精神的健康水準が高まる（後期増加率の漸増）点を確認すると同時に、3 年次までに認められる女子優位の曲線が 4 年次以後男女並行の曲線経過をとる点に着目したい。成長につれて 5・6 年次には明らかに破線を凌駕し、休効も全平均より高まっていた。

4 したたか型：図 7-7

行動力あり、強気にどしどし実行する。剛毅・豪放な親分タイプ。強気が昂じると、気まま、勝

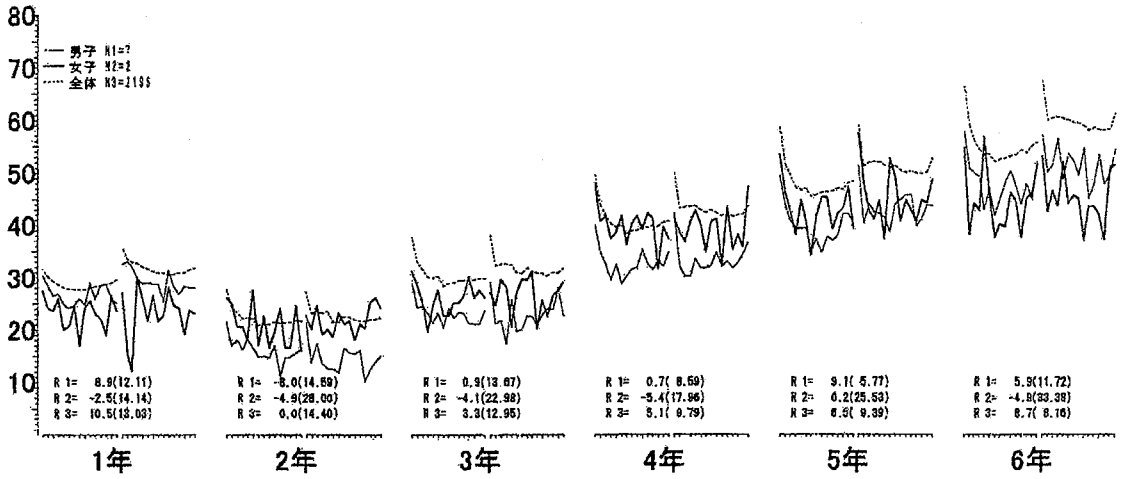


図7-7 人柄類型13分類 4したたか型

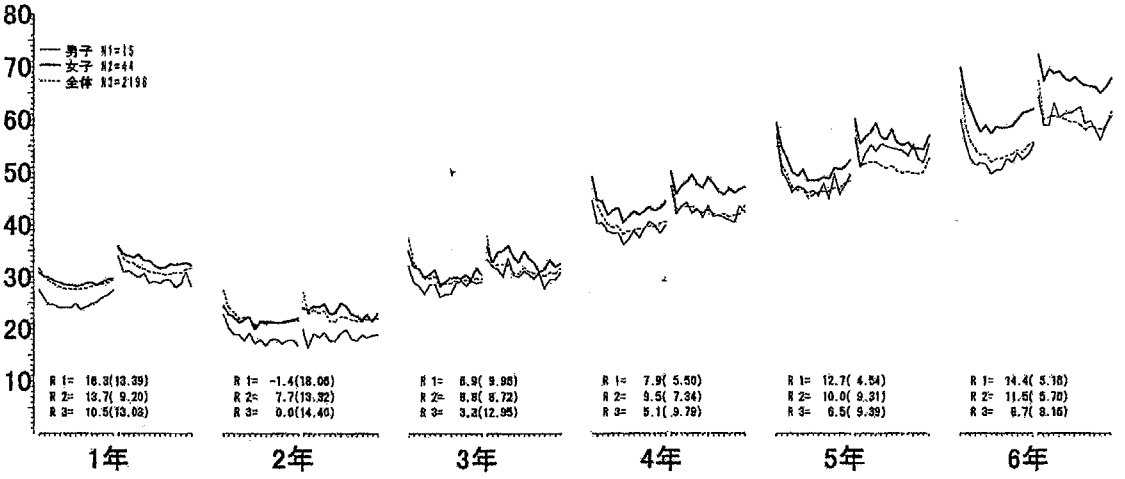


図7-8 人柄類型13分類 5しっかり型

手、強情、悪ボス、暴力などが表立つ。曲線は動き幅の大きい緩みのない経過をたどり、その中に飛び上がりあり、平坦、落ち込みが不規則に続く。凹凸角ばる強い動きが特徴である。出現率順位は13類型中12位、13人・0.5%。例数が少なく個人曲線に等しいが、男女いずれの曲線にも4型の特徴を見てとることができる。両曲線とも全平均よりも下に位置づく点は3-1ほがらか型と同じである。健康度判定に性差なく、3健康度水準間にも差は認められなかった。

5 しっかり型：図7-8

手堅く、物堅い。得心したことは最後までやり抜く粘り強さがある。責任感あり、道義心が強い。柔軟性不足が表立つと、頑固、強情、短気、偏屈が出てくる。曲線は前期後半部分からの上昇を引き継いで、後期中高（なかだか）（2分目からの凸型）傾向を示す。出現率順位は10番目、72人・2.6%と少ないが、女子が明らかに多い（男:女＝27.8:72.2%）。健康度判定は学年進行とともに高度群が増え、最終学年では、53人・73.6%に達する。したがって平均曲線は、男子の適応の固さが目立って、3年次まで全平均よりも下位に位置するが、4年次を境に全平均を凌ぐ姿を示し始め、女子は3年次以降一貫して高作業量・高後期増加率を示し、7し

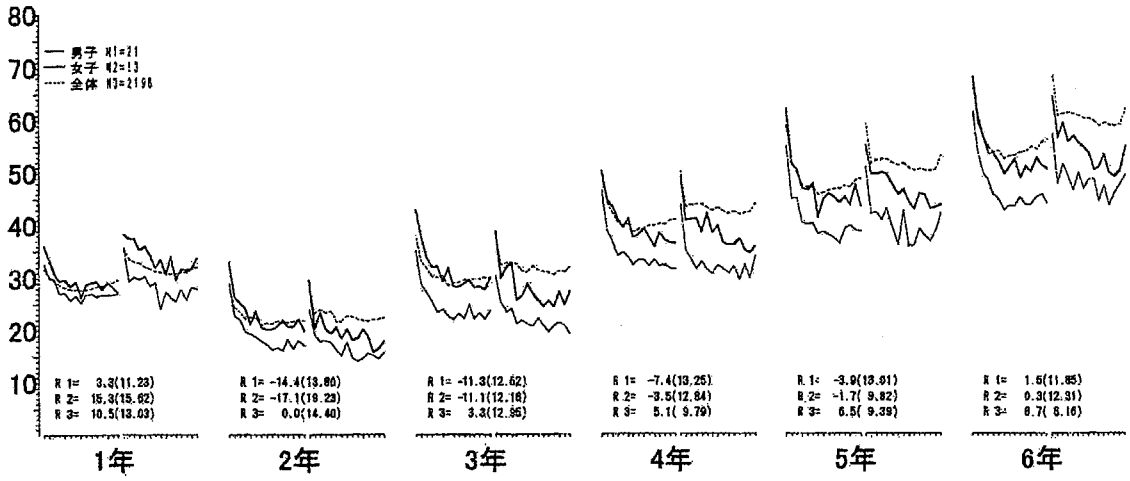


図7-9 人柄類型13分類 6さわやか型

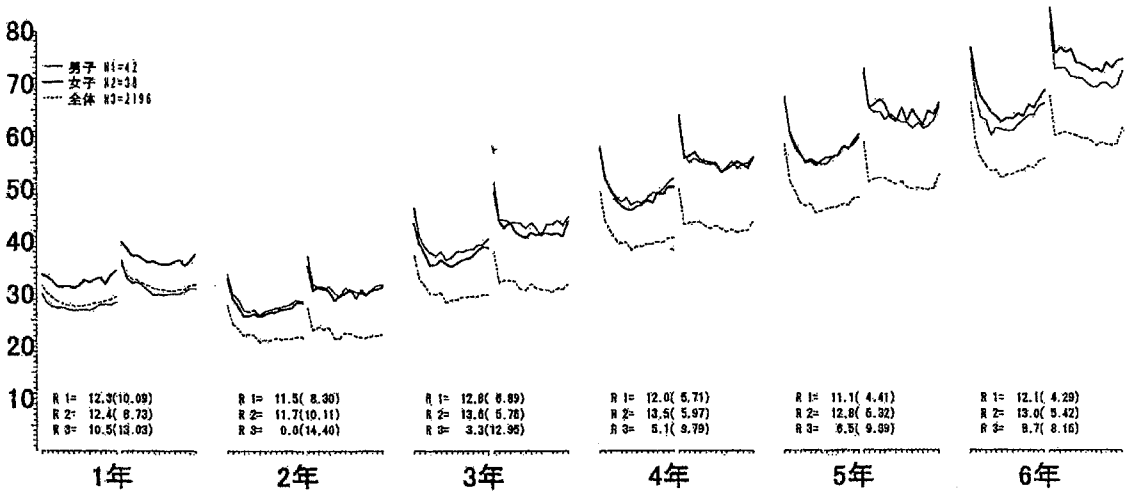


図7-10 人柄類型13分類 7しなやか型

なやか型に次ぐ安定性を示した。環境適応にとまどっても現実に立脚して理想を求める、この型の発達軌跡が明確に見てとれる。

6 さわやか型：図7-9

即決即断、即行的速さが特徴。さっさとやってのけるが切り上げは早い。押し出しの強さはあるが、さらっとしていて解放的。ブレーキ不足で抑制がきかないと、出しゃばり、出たらめ、無鉄砲になり、尻切れトンボや投げやり、暴力的になりやすい。曲線は、大きな下降と動揺曲線の中に凸凹角ばる強い動きが加わる。全平均を下回り、男子の低作業量、低休効が顕著である。⊗法の1年次を除いて、5年次まで休効が負値を示すのはこの型のみであった。したがって、健康度判定3分類では、低度群が6年次で過半数、4年次では8割を越していた。出現率順位は11位、46人・1.7%にすぎないが、発達効果の最も低い個性であった。

7 しなやか型：図7-10

表立つ方ではないが適応よく、偏りがない。ほどのよさが特徴であり、安定性がある。欲を言えば積極性がほしく、不調時に、消極、無口、引込思案が表れる。

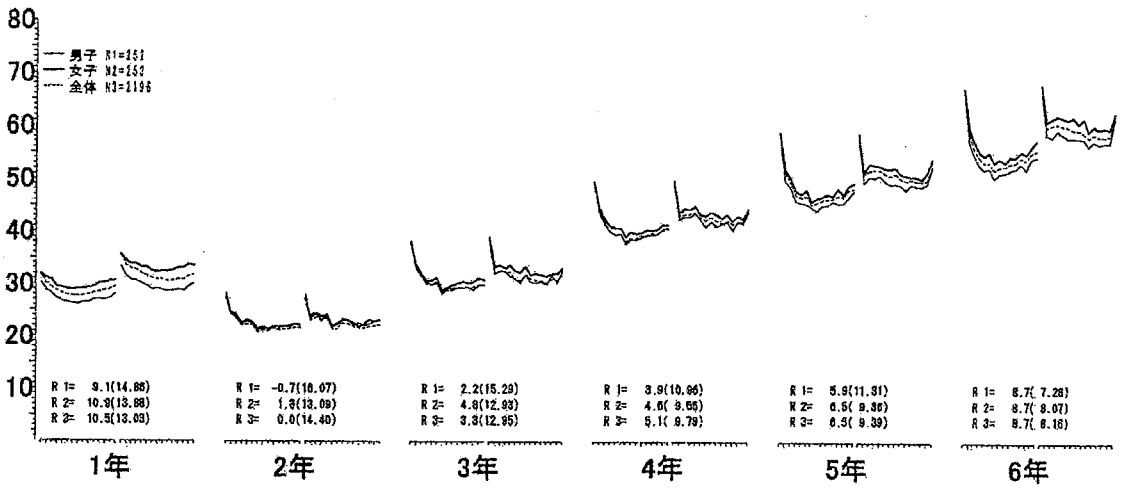


図7-11 人柄類型13分類 8ぽっつり型

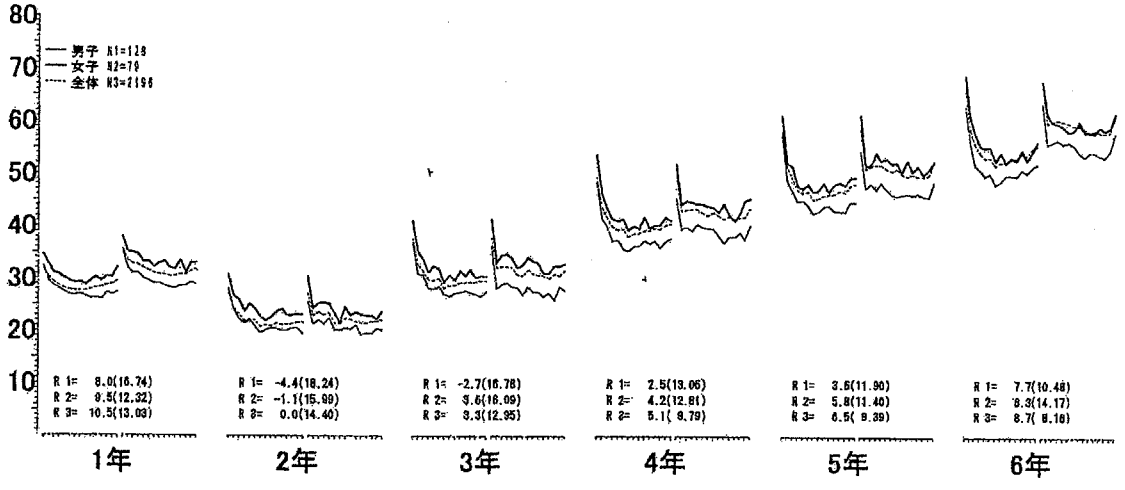


図7-12 人柄類型13分類 9はでやか型

曲線は、出るところは出て、出入り幅の少ない緩やかな上昇傾向を示す。男女ともに全平均よりも作業量水準が大きく高い。1年次と6年次を除けば性差が認められず、全体平均を大きく凌駕し、意欲的で粘り強い。休効は常に2桁を示し、健康度水準の高さが明確である。6年次判定では高＋中上度が8割を越し、中下度は1人のみ。出現率順位は7番目、103名・3.7%であるが、性差なく（50：53人）、高健康・高適応集団であった。

8 ぽっつり型：図7-11

自己認識の2分化が根底にあって、独自の感性の下で選択性に磨きをかけ、自分流儀を貫いて大成する。職人気質・名人肌・昔の学者タイプが相当し、対人関係のわずらわしさを避けたところで自分の世界を構築する。しかし、非社会性、選択性などの偏りが出ると孤独、ひとりよがり、すねもの、冷淡、放浪癖に進んだり、作業障害が拡大すると忘れ物や事故頻発につながりやすい。曲線は、敏感時と鈍麻時を中心に5型に分化し、行動特徴も異なるが、根本は変わらない。平均曲線は、8-1昂然熱中、8-2悠然冷静、8-3端然純真、8-4超然鋭敏、8-5瓢然の5型をひとまとめにして作図した。全平均に対して、2年次は男女とも並行して重なり、4年次から女子が上位、男子が下位に分

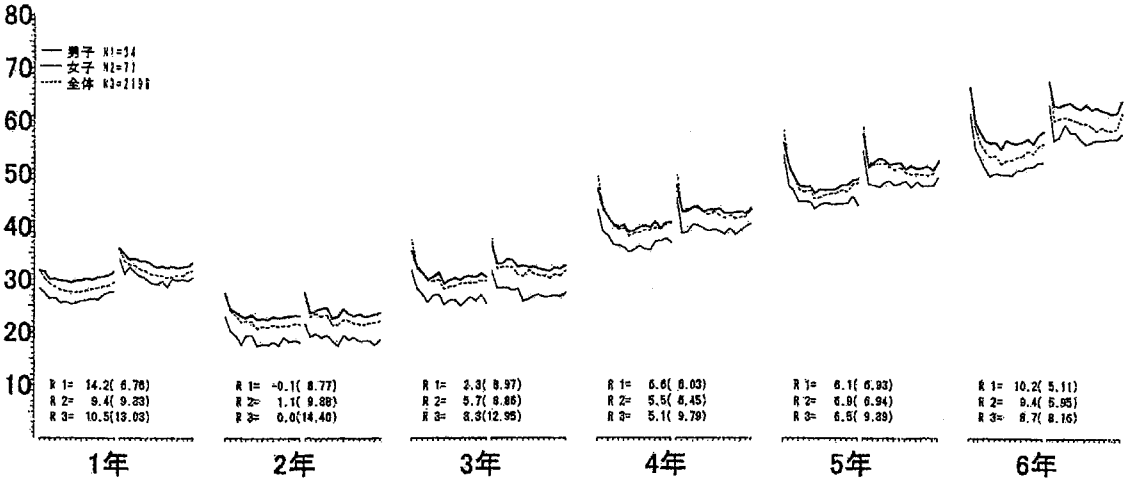


図7-13 人柄類型13分類　10きっちり型

かれ、全 2196 名の性差に準じた経過を示した。出現率順位は 1 位、640 人・23.1%。男女比は等分であった。

健康度 3 分類別比較も、男子は 4・5 年次に低度群が増加するのに対して、女子は最終 6 年次に高度が多く、低度が少ない結果に収斂した。女子優位の全体傾向が学年進行とともに拡大する点は、8 型が一般的発達水準を維持している証明例となり、好ましい経過と考えられる。大阪地区は躁鬱地帯と呼ばれる中で、孤高を好むこの型が最多数を示すところに、本対象校の特徴が表れている。

9　はでやか型：図 7-12

自尊心強く、勝気。人の先頭に立って活躍することを好むが、やることにムラがついて廻る。合理精神が昂じて功利的になったり、気分や事の次第によって態度や結果が極端に変わったりしやすい。不健康時には、出しゃばり、みせかせ、お天気や、嘘、暴力に傾く。理論的に説明のつかない不自然な飛び上がり曲線と、不健康時に示される誤答多発曲線が分かりやすい。しかし、複数回の検査毎に曲線傾向が異なり、人柄判定が特定されない例がある。出現率順位は第4位、325名・11.7%、男子が 209 人・64.3%を占める。精神健康度 3 分類比較では、入学時に性差なく 3 等分に近い比率を示すのに対して、低度群が順増して 5 年次には 6 割を越し、最終学年でも 53.8%が該当する。4・5 年次には男子の低度群が明らかに増加していた。

平均曲線は、男子が全平均よりも大きく下廻り、意欲の湧かない下降傾向が 5 年次まで続く。女子は全平均の上位に位置するが、学年進行とともに差が縮まり、6 年次は全平均と交錯する。休効は男女とも全平均より少なく、作業量の順増以外は意欲低下に陥る姿が明らかだった。

10　きっちり型：図 7-13

きまじめ、几帳面。慎重で緻密。基本から取組んで型通りの仕上がりを決める人。その分、固執に傾くと頑固、強情。爆発に傾くと短気、癇癪を起こしたりする。類型説にいう粘着性格に該当する。曲線は、上下への動き幅狭く、平坦傾向を示す。破線の全平均曲線と比べて、前期の弯曲が浅く、後期の下降が少ない曲線特徴がよく表れている。平均曲線では明らかに女子が優位、男子は全平均を下廻る。⊗法から加算法に切り換る 2 年次から 3 年次までの男子に、その傾向が顕著に表れている。出現率順位は 6 位、145 人・5.2%。女子が 96 人・66.2%と男子の倍近いが、健康度水準では、2 年次の女子が高度に 51.1%、男子が中度に 54.3%の高率を示す以外に性差なく、低度が 10～20%と好ましい発達傾向を示していた。

3）類似人柄群別発達特徴

曲線型の種類と行動特徴の関係を追求した曲線研究の初期には人柄類型の細分化に目が向けられ、統合の方向は既存の類型説に立脚した躁鬱型と分

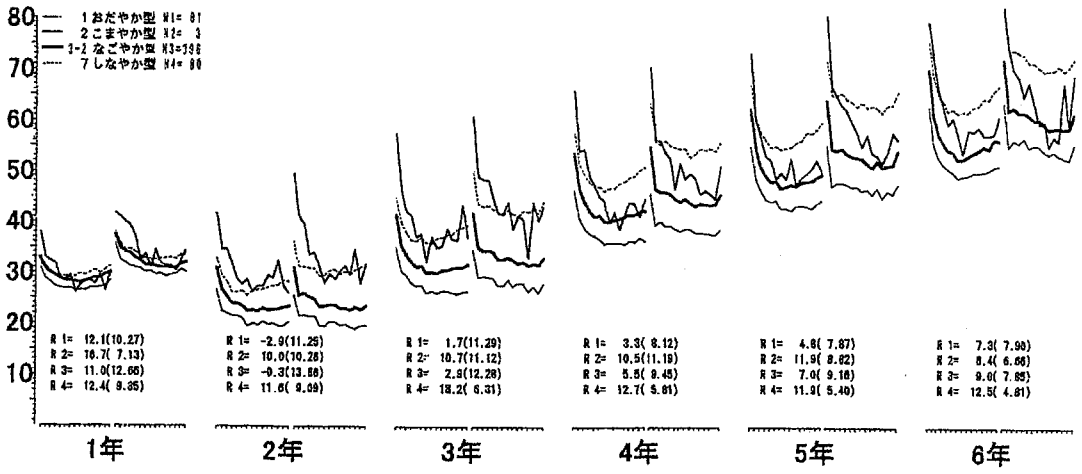


図8－11 類似人柄 Ⅰ群;すなおな子

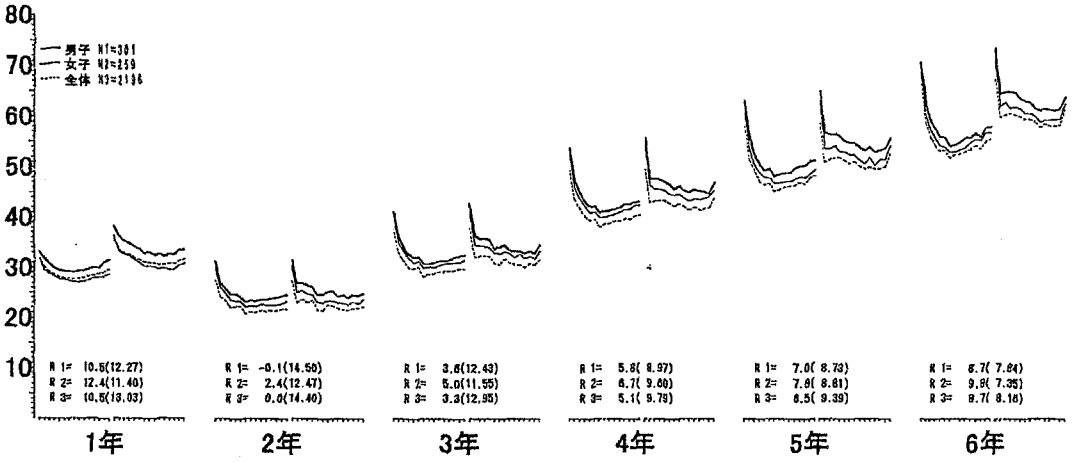


図8－12 類似人柄 Ⅰ群;すなおな子

裂型（孤高型・ぽっつり型）の範囲にとどまっていた。類似人柄群別分類の着想は、附属小学校における担任教師との面談から生まれた。曲線論上の関心から子どもの生活実態を聴く機会に、「この子はどんな子ですか」と尋ねる。先生方の応答は多様だが、人柄類型との関連の高い応答が分化していった。群化は表１（p.4 参照）に見る通り 4 分類に収斂し、個性理解の便法として集団指導に役立っている。群別平均曲線を中心とする特徴は次の通りである

i 群：すなおな子：図 8-11,12

1 おだやか型

2 こまやか型

3-2 なごやか型

7 しなやか型

先生方の指導を抵抗なく受け入れ、着実に実践に移す適応のよい子たち、「すなおなよい子」である。指導に手がかからない。授業がやりやすい。おとなしい。ちょっと引込み思案。積極性があるともっとよくなるのだが、などの評を得ている。先生方の掌中にあって安心して指導でき、指導成果のよく上がる子たちである。彼らは、健康度中度以上の 1、2、3-2、7 型に集中する。曲線論から見れば異なる個性であるが、集団指導が前提と